

# ナルシシズムの「空虚」と文学

——ジュリア・クリステヴァの一次同一化論と

そのSF・ホラー・ミステリーを含む文学研究への応用について——

田 中 雅 史

## はじめに

この論文では、最近よく社会で話題になる自己愛の問題を文学研究にどのように結びつけるかについて、ジュリア・クリステヴァのナルシシズム論であるオブジェクトと「想像的な父親」(père imaginaire)の理論を、対象関係論・自己心理学・ユング派などと比較検討しつつ考えたい。その際、自我理想についても参照し、また実例としてSF・ホラー・ミステリーの古典や村上春樹などの現代小説も取り上げる。

自己愛(ナルシシズム)という概念は、リビドーを自我に向けるというフロイトの古典的なものから、現代のコフトの自己心理学における、自己を愛せないが故に誇大な自己像に固執する自己愛者という真逆といえるものまで幅広い。現代は自己愛の問題が目立つ社会だが、クリステヴァは「愛のオブジェ」(1982年)において一次同一化というあまり取り上げられなくなった概念を使いつつ、幼児期の発達において自己愛が重要な役割を果たすという肯定面にスポットを当てている。クリステヴァは一次同一化を哲学における「現前」(presence)の問題と重ねており、幼児を「不在」から「存在」へ導くという存在論の意味を持たせている。

対象関係論などの精神分析理論では、幼児期の〈母親からの分離〉にともなうネガティブな感情を自我ないし自己がどのように消化するかに焦点が当てられている。それは母親という絶対者の「不在」(absence)をどう受け止めるかという問題であり、クリステヴァは彼女が「想像的な父親」と呼ぶ自我理想的存在の直接無媒介的現前が鍵になると論ずる。

対象関係論では「良い対象」(メラニー・クライン)「抱えること」(ウィニコット)「アルファ機能」(ビオン)、自己心理学では「理想化」「鏡映」などの自己愛転移が同様の機能を果たすとされるが、クリステヴァの場合と比較しながら考えたい。

ユング派の個性化過程は、元型イメージを統合しつ

つバランスのとれた「自己の全体性」へ向かうプロセスである。井筒俊彦(『意識と本質』)によると深層的本質から分節されるという元型は、夢の中のイメージや白昼夢として表層意識に「現前」するのだが、そこには善悪の両義性、つまりネガティブな感情とそれを修復する機能がともに含まれている。ユングが依拠した集合的無意識の普遍性という仮説は現代では成り立たないことがほぼ明らかであると思うが、女性の自立における否定的アニムスの分析、その対照である男性の中の女性性の分析など、現代でも有用と思われる多くのポイントがある。また、「良い対象」「悪い対象」「アルファ機能」「理想化自己対象」などの機能的用語に比べて、「影(シャドウ)」「アニマ・アニムス(異性像)」「老賢人」「太母(グレートマザー)」「旅」など具体的な元型イメージは、個性化過程のリニアな硬直性から外して内的な空虚に対するナルシシズムの覆いというクリステヴァ的な論点から見直せば、肯定的ナルシシズムの内容を具体的に豊かなものにしてくれる。20世紀半ばに流行したユング派の文学作品分析への応用も、自己愛と絡めれば現代に生かすことができるであろう。

## 1 クリステヴァの一次同一化論

フロイトは「自我とエス」でエスと自我の関係について図入りで説明した後、自我から分化した超自我(ここでは自我理想と等置されている)の説明に進む際に、「幼児期の初期に発生した同一化」について次のように書いている。

この問題によって、自我理想の発生の問題へと連れ戻される。自我理想の背後には、個人の最初の(そしてもっとも重要な)同一化が潜んでいるのである。これは個人の〈原始時代〉である幼児期における父との同一化である。この同一化は当初は、対象備給の結果や帰結とはみえず[性的対象

としての選択をあきらめる代わりに自我に取り込んだものではないという意味], 媒介なしの直接的な同一化であり, どのような対象備給よりも早い時期に行われるものである。(p. 231)

そして原注には「父との同一化というよりも, 両親との同一化といった方が正確であろう」(p. 231) とある。

これがクリステヴァも「フロイトにおいてめったに言及されないこの同一化」(『愛のアブジェ』p. 159) と書いているフロイトの一次同一化 (primary identification) の説明である。それは対象と自我の「最初の(そしてもっとも重要な)同一化」であり, 「媒介なしの直接的な同一化であり, どのような対象備給よりも早い時期に行われるもの」である。ここでフロイトの言葉にもある「直接無媒介性」は, クリステヴァが一次同一化を取り上げる際の核心となっている。

フロイトは一次同一化という概念は作り出したもののそれを深めることをしなかったが, その後クライン派は幼児期の自他未分化状態における取り入れ同一化や投影同一化などの同一化の力動形態に基づく理論を発達させた。そのため現在では発生段階的な一次同一化という用語はあまり使われなくなったが(『精神分析辞典』の項目「一次的同一化」), クリステヴァは『愛のアブジェ』において, 一次同一化にラカンのいう象徴界の父と原初的な母とを仲介する重要な転移という位置付けを与えている。

この点に関しての邦文文献としては, 講談社の現代思想の冒険者たちシリーズの西川直子『クリステヴァポリロゴス』第三章に, 80年代のクリステヴァの著作の詳しい説明がある。他に『愛のアブジェ』について心理臨床の立場から論じた石田暢子「Kristevaの主体形成とアブジェクションの発生」では, 本論で取り上げるのとほぼ同じ箇所についての詳細な議論が見られる。しかし, どちらも本論で強調する「直接無媒介性」については触れていないので, その点を含めて以下詳しく検討したい。

対象関係論などでは〈母親からの分離〉を心理的発達において重視するが, クリステヴァはその分離に伴う不快感(「悪い対象」に相当する)をアブジェクトと呼ぶ<sup>1)</sup>。「愛のアブジェ」のアブジェとは, クリステヴァがアブジェクトとほぼ同義で使っている言葉である<sup>2)</sup>。

クリステヴァは『愛のアブジェ』で, 母親から分離する幼児は「固く結合した空虚とナルシズムが想像

界のゼロ度となっているまさにこの地帯に存在する主体として, 自分を意味づけています。」(p. 159) と述べている。そして「ナルシズムの内部でこの空虚を保持」(p. 159) してアブジェクトの氾濫した単なる混沌に陥ることを防止するのが, 一次同一化であるという。

クリステヴァによれば一次同一化は, フロイトが直接無媒介的という言葉で表現した, 先の引用のような「複雑で両性的ないわゆる想像の(〈個人の先史時代の父〉)の審級」への転移である。(p. 160) クリステヴァはこの無媒介性について, 「ここで分析医たちの注目を集めたようには見えないこの無媒介性について考えてみましょう」(pp. 160-161) と述べて, ヘーゲルやハイデガーの言葉を引きながらそれが絶対的なものの認識への現前の仕方であることを説明している。

「〈認識〉における〈絶対的なもの〉の現前は, 無媒介的に主体に現れる」のであり, 「私たちは無媒介的に[絶対的なものであるキリストが傍にいるという]<sup>バルレーシア</sup>再臨の中に《つねに-すでに》存在」している。(p. 162. 訳文一部変更) このように(直接)無媒介的という言葉は, 哲学的主題である(神の)「現前」について述べる場合に使用されるような, 関係から独立して対象抜きで自らの絶対者としての確実性が担保されるような意識への現われ方を指す。その表現をフロイトが一次同一化に用いたということは, それが「対象」の「同一化」というより, リビドーの対象でない「自律的な同一者」(p. 164) への幼児の転移もしくは置き換えというべき特殊なものだということを示すとクリステヴァは指摘する。

その「自律的な同一者」とは, ラカンのいう「ファルスへの母の欲望」の「母」と「ファルスへの欲望」が凝固した「想像的な父親」(père imaginaire) という原初的自我理想である。「母」と「欲望」の凝固は, 「母」という幼児にとっての完全対象との融合状態と, その「母」が「欲望」を持つという完全性の空想からの分離状況の一致という矛盾をはらむものであり, その矛盾即一致の神的現前への転移こそが, 分離不安という「空虚」をナルシズムの内部にそのまま保持するというわけである。

この転移は, 「天から降ってくるかのよう」(p. 163) なるものである。

〈想像の父〉への無媒介的な転移は, 〈想像の父〉が天からあなたのところに降ってくると, つまりあなたのところへ転移するのは〈想像の父〉の方

だとの印象をもってしまうほどなのですが、こうした転移はカオスでありえたものにたいする、そして…アブジェクト（おぞましいもの）になりはじめるものにたいする拒絶の過程を支えています。（中略）要約しますと、第一次同一化とは、母を《アブジェ》として構成する際の相関物である〈想像の父〉への（からの）転移であるように私には思える、ということです。ナルシズムはこの（〈想像の父〉との、また〈母〉《アブジェ》との）相関関係でありましょうし、この関係は前に述べた転移の中心にある空虚のまわりで作用するのです。（p.165）

このようにクリステヴァは一次同一化を、〈母親からの分離〉に伴ってアブジェクトと同時に構成される原初的の第3項である「想像的な父親」が、直接無媒介的に幼児の主体に置き換わるような特殊な転移性同一化であると考えている。これを指してクリステヴァはナルシズム（の覆い）と言い、アブジェクトやアブジェクションを「ナルシズムの危機」（『恐怖の権力』p.22）と呼んでいるのだ。

自他未分化状態での未熟な自我と空想上の対象の間で起こるコミュニケーションというモデルで説明する対象関係論に対し、クリステヴァの一次同一化論は「現前」にまつわる思弁的な議論にも見えるが、クリステヴァ自身は自分の論に根拠を与えるのは論理性のみではなく精神分析家としての経験であるとして、「愛のアブジェ」の中で3人の症例を報告している。

『初めに愛があった』（1985年）で、クリステヴァは自身の信仰体験について語りながら、「のちに神秘主義者の名だたる体験の数々を読むにおよんで、おそらく極端な単純化の結果なのでしょうが、愛と庇護の場<sup>アンスタンス</sup>との同一化、まさしく一次的と呼ぶべき同一化の動きとして信仰を描き出すことができるのではないか、という感想をもちました。」（p.43）と述べている。クリステヴァが神の愛（アガペー）に例えている直接無媒介的同一化は、『恐怖の権力』でも言及されている中世の女性神秘主義者アンジェラ・ダ・フォリーニョの神秘体験のような、信仰の体験に近いのだろう。

対象関係論などのモデルの想定する最初期の同一化は、自他未分化という自と他が未分化のまま併存するコミュニケーション領域において、共感や愛などの情緒的ケアによって自我もしくは自己の基盤が構築されるプロセスである。クリステヴァの一次同一化論は、そこに宗教的といってもいい愛の現前を持ち込み、そ

れによって空虚な幼児、ラカン風に見せ消ちに書く「幼児」が、幼児＝ナルシスという愛する＝される「存在」に置き換わるという哲学的存在論でもある点特徴といえる。聖書ははじめに言葉があったとし、ラカンも一種の言葉であるシニフィアンをはじまりに置くが、クリステヴァでは彼女の書名『初めに愛があった』にあるように、エロスではなくアガペーとしての愛の現前が人としての存在のはじまりなのである。

クリステヴァは『愛の歴史＝物語』（1983年）の中で「ナルシズムの覆い」について次のように言う。

もしナルシズムが分離の空虚に対する防衛であるなら、自我の強化の途上でナルシズムに付随するイメージ・表象・同一化・投影といった仕掛けの総体はその空虚を悪魔祓いする手段であると言える。分離は我々がナルシストまたはナルシストに、少なくとも表象の主体に、なる機会である。にもかかわらず、分離がもたらす空虚は我々の同一性・イメージ・言葉が飲み込まれる危険のある、かろうじて覆われた深淵でもあるのだ<sup>3)</sup>。

「愛のアブジェ」は1981年の講演が1982年に『テル・ケル』誌に載ったもので、『愛の歴史＝物語』（1983年）の第1章「フロイトと愛」はそれに大幅加筆したものである。この引用は先に挙げた「愛のアブジェ」165ページからの引用の直後に『愛の歴史＝物語』で書き加えられた部分で、対象関係論的な用語を多く使用してナルシズムの覆いという概念を明確化している。ナルシズムは、自我の発達途上にあって分離の空虚に対抗する覆いである「イメージ・表象・同一化・投影といった仕掛け」を提供する。それが主体を生み出すのが、安定したものとはいえず、分離不安の「深淵」に飲み込まれる危険を免れていない。

「深淵」に飲み込まれた場合は、どのような状況になるのか。対象関係論とコフートの自己心理学をつなごうと試みる本の中で、フィル・モロンはグロットシュタインの概念である「一次同一化の背景的自己対象」が存在しない場合について、次のように述べている。

信頼できる背景的自己対象が存在しない場合の自己体験は、不思議の国のアリスのそれに似ている。アリスは、安定性も予測性も一貫性もない世界に取り残されるのであるが、その際に、どこでも住人たちは完全に共感を欠いた奇妙で残酷なふるまいをし、彼女は自分自身のさまざまな次元に次々

と起きる変化に遭遇する。(中略) それは、あたかも自己体験という模様が織り込まれる布地自体が欠けているか、布地が薄いためにあちこちに破れや穴があるかのようなのである。(p. 238)

これはヤン・シュバンクマイエルのアニメーションのアリスやデヴィッド・リンチの映画を思わせる、空虚が広がって主体が成立しなくなった状況の描写である。

ユング派のいう元型イメージは「影」を始め「アニマ(アニムス)」「太母」「老賢人」などの現代文明に生きる人間の表層的意識が等閑に付してきた心的古層に繋がるイメージで、夢などに現れるそうしたイメージを分析することで人は古代社会のイニシエーション(通過儀礼)の参加者のように、自らの内なる原初的な部分を統合する。血なまぐさい悪でもあるようなイメージの統合は、オブジェクトとナルシズムのペアと同種のものである。

アニムスの肯定面や「老賢人」などはクリステヴァの「想像的な父親」に近い。ユングは『赤の書』というツァラトゥストラ風に物語化された自らの内面の記録をつけていたが、そこに「アクティブ・イマジネーション」技法で実際にヴィジョンとして見た翼の生えた老人フィレモンが現れている。ユングはこの神秘的な人物の直接無媒介的現前を含む別の内的生を、社会的な人格の送る生と並行して生きていた。それは時代の動乱や狂気の不安に揺れる内面のオブジェクト的混乱を覆うナルシズムのヴェールを、ユングに提供していたのである。

## 2 ナルシズムと芸術作品分析

このようにナルシズムを捉えると、文学などの芸術作品に見られるナルシズム的なイメージや言葉がどのように「母」不在の空虚やオブジェクトを覆う防衛として作用しているか、空虚な「不在」を含んだ「存在」に安定感を与える、「愛」に満ちた神秘的現前が見られるか、などの分析の方向性が生まれる。私は拙著『幻滅からの創造』で『ゲド戦記』のような影の統合パターンをプロットに取り込んだ現代日本小説群を、対象関係論などの発達モデルから抽出した投影同一化-取り入れ同一化というサイクル(これも一次同一化のことである)と比較して論じた。クリステヴァのナルシズム論は、一次同一化をナルシズム(の空虚)や自我理想の問題と見ることで、私が『幻滅からの創造』で試みた方法の適用範囲を幅広い作品に拡

張するものである。

クリステヴァは「愛のアブジェ」と『愛の歴史=物語』<sup>イストワール</sup>第1章「フロイトと愛」で作り上げたナルシズム理論を、『愛の歴史=物語』<sup>イストワール</sup>のそれに続く章で論じた隠喩・中世の『薔薇物語』・スタンダール・ボードレールなどの文学の中に、神秘的な「愛」や「母」を見出す手がかりとして活用した。さらに『黒い太陽』(1987)では主にメランコリー(抑鬱)に焦点を当てながら、文学・美術作品の分析にナルシズム理論を応用してみせた。

クリステヴァは『黒い太陽』で、

もろもろの芸術が示している手法は、ナルシス的な自己満足の輪郭を描きだしているが、しかしこれらの手法は、喪を単に躁状態へと反転させることではなく、失われたくもの<sup>シヨーズ</sup>を昇華によって支配する能力を芸術家や通人に保証するものでもあるように思われる。(p. 9)

と、さまざまな時代やジャンルの芸術作品がナルシズムによって分離不安を統御すると述べている。ドストエフスキー作品における「赦し」もその一つである。

ドストエフスキー作品の苦悩についてクリステヴァは次のようにいう。

内部でも外部でもなく、両者の中間にあって、自/他の分離のはじまる端緒、さらには分離が可能になる以前でさえある場に、ドストエフスキーの苦悩はたたずんでいるのだ。(p. 99)

このように、ドストエフスキーの苦悩を自他未分化状態のオブジェクト的苦悩と解釈している(ドストエフスキーの「罪」については、『恐怖の権力』でもオブジェクトとして論じている)。そして、「赦し」という理想との同一化がその覆いとなっていると分析している。「赦し」は、

話者が慈愛深い理想に同一化することであり、それによって、抑鬱状態にある者の悲嘆の基盤をなしている復讐心からくる罪責感や、傷ついた自己愛による屈辱感といったものが除去されるのである。(pp. 9-10)

先に見たクリステヴァの一次同一化論で敷衍して考えると、これは現前した慈愛にオブジェクト的苦悩が溶

け込んで一体になっているわけである。「抑鬱状態」「悲嘆」は対象関係論では抑鬱ポジション（D ポジション）の特徴であり、クリステヴァはそのことを意識してこのように書いている。

「《第一次同一化》として、また《瞬間的分裂》と呼びえたものとして私の描写しようとするこの基礎的で心的現象の細分化された様態」（『愛のアブジェ』p. 167）と書いているように、クリステヴァ理論では抑鬱ポジションは直接無媒介的な分離＝同一化によって一気に達成されるので、妄想分裂ポジション（PS ポジション）はそれと裏腹のある意味失敗状態であって、時間的な前後関係にはない。クリステヴァにおいてPS 的なアブジェクトは明確に克服されるものではなく、超越的な現前が揺らぐたびに常に「おぞましいもの」として立ち現れる可能性を残すのだが、それでもこの場合の「赦し」のような自我理想としての慈愛を含む自己愛的象徴形成は、空虚の覆いとしてアブジェクトのコントロールに役立つ。それは下の引用にあるような、不在をシニフィエとする「超記号」の形成である。

昇華の力学は一次過程と理想化を動員しながら、抑鬱に沈む空虚の周囲に、またその空虚とともに、ひとつの超記号 hyper-signe を織りだす。それはもはや存在しない何ものか、だがよりすぐれた意味作用を私のために取り戻し（中略）なぜ、よりすぐれた意味作用かといえば、私は今ここで、永遠のために、第三者のために、揺らぐことのない調和のなかで、虚無をよりよく作りなおすことができるからである。（p. 12）

この部分も一次同一化を含んだ説明といってよい。超記号とは「ファルスへの母の欲望」と同一化して象徴界と想像界を貫通するナルシスである。クリステヴァは「美」もこのような超記号に含める。

美は喪失のもつみごとな顔貌として姿をあらわし、喪失を生かしめるために喪失を変身させるのだ。（p. 12）

このように美的カタルシスも空虚の覆いであるとするが、これはクライン派のドナルド・メルツァーの「美的対象」理論に近い<sup>4)</sup>。

こうしたクリステヴァのナルシズム論をめぐっては、クリステヴァのアブジェクトや愛の理論について

のカンファレンスがアメリカで開かれ、1冊の本にまとめられている<sup>5)</sup>。

『愛の歴史＝物語』<sup>イストワール</sup>で取り上げられているのが新約聖書・トルバドゥールの詩・西洋近代の神秘家や作家など西洋種であることが示すように、愛の神的現前が人間存在の根底であるというクリステヴァの発想は西洋的でキリスト教的と思われるので、こうした方法を日本や東洋の芸術作品に適用できるかは疑問の余地がある。しかし、クリステヴァの「空を含む実在」というナルシズム論は、仏教の「空」や「(虚)無」などの日本をはじめ東洋の文化や物の考え方に深く関わっている観念に通じる。そこでは同一化対象である自我理想的「想像的な父親」に当たるのは、キリストやアガペーではなく、仏陀、弥勒、如来蔵（仏性）や禅問答のエピソードに見られる禅僧などであろうか。漱石の則天去私をはじめ近代作家の多くには仏教的感性が染みついているし、現代の漫画も含め大衆文学や大衆文化で人気のあるのは、現世の空虚を理解し、禅味を解する粋なキャラクターである。そのような存在に読者が満足とともに同一化し共感するのだが、そこにも全能者への転移＝愛はあるのだろうか？それとも愛の現前を核とする感性は、日本人のものとは別なのだろうか？

例えば宮沢賢治『銀河鉄道の夜』では、暗黒星雲の「石炭袋」でカムパネルラという愛着対象を喪うジョバンニは皆の「ほんとうの幸」を目指すという自我理想と同一化する。背景の銀河（ミルキーウェイ）という母親的愛のイメージは、キリスト教の十字架も捨身という仏教的自我理想を体現するサソリも分け隔てなく含みこんで、ジョバンニに現前している。

あるいは夢野久作『ドグラ・マグラ』では、柱時計の音の一瞬に生命の全歴史を含んだ呉一郎（らしき人物）もしくは胎児の内界が現前するという、仏教の世界観を反映した物語である。巻頭歌「胎児よ 胎児よ 何故踊る 母親の心がわかっておそろしいのか」は、対象関係論でいうと悪い母親の分裂排除に相当する。超絶的な犯罪を見抜く名探偵でもあり、自分の精神を保つことすらできない全くの無力者でもある主人公は、自分自身のことを描いた物語を読むうちに母の愛の証拠に行き当たる。

この2つの作品をとってみても、空虚な自己と超越的なものの現前と愛とがポイントになっている。愛する神である父というより母方向に重心が寄っているようではあるが、本論で扱っているような方法は日本文学にも有効と考えられる。

さて、『黒い太陽』でクリステヴァが取り上げたのは、先に触れたドストエフスキー以外はネルヴァル、ホルバイン、デュラスなどの名の通った芸術家であるが、私の考えではクリステヴァ理論はSF・ホラー・ミステリーなどにも応用可能である。次節ではこの点を考察し、それから村上春樹の作品を例にとってエンターテインメント作品と文学についても考えてみたい。

### 3 ナルシシズムとSF・ホラー・ミステリーなどのジャンル

現代のSF<sup>6)</sup>は20世紀の特に半ば以降は時代の雰囲気感を反映して暗い雰囲気感の作品も書かれているが、基本的には科学の発展への楽観的な期待に根ざす全能感を基調とする。つまりナルシシズムの実例にあふれたジャンルである。

例えば、アイザック・アシモフの「ファウンデーション・シリーズ」に出てくる天才的な学者ハリー・セルダンは、心理歴史学 (psychohistory) という架空の科学を使って銀河系に広がった人類の帝国の滅亡を予言し、またそこからの復活を計画する。この人物とその独自の学問領域の全能性によって、人類がぶつかる様々な障害は彼の予想の想定内のものであることが次々に明らかになり、人類の暗黒時代は予定調和的に輝かしい新時代に向かうというストーリーの流れは、心地よいナルシシズムに読者をいざなうものである。

ジュール・ヴェルヌの『海底二万リグ』の潜水艦ノーチラス号は、その時点での人類の英知を詰め込むという全能性と世界からの孤立を体現している。視点人物のアロナクス教授を通して見るネモ船長は謎めいた暗い背景をもつ人物であり、ノーチラス号はその「空虚」を包摂して全世界の海底という巨大な深淵を旅する、ナルシシズムの防壁のような科学技術の要塞である。

エドガー・ライス・バローズの『火星のプリンセス』では、主人公の南北戦争時代のアメリカ人ジョン・カーターは、重力の違いから火星ではスーパーマンのような全能性を発揮する。ターザンの作者でもあるバローズの描く主人公は素朴な男性的ヒーローとして予定調和的に危機に陥るヒロインを救出するが、異形の異星人や異星のペットは常に彼のサポート役として描かれている。近年の『ジョン・カーター』としての映画化や類似性の認められる『アバター』などにも言えるが、サイド的オリエンタリズムの構図によく当てはまるストーリーである。物語はデジャー・ソリスと結ばれ

た後不本意にも地球に戻ってしまったカーターの手記からなるが、後に残してきた火星は幼児にとっての母親のような「失われた楽園」の郷愁に満ち、そこに帰ることが彼の願いとなる。

このようにSFは、これまで述べてきたような分析の方向性から見ると、科学的な楽観主義が全能の「母親」もしくは慈愛に満ちた母親的な特性をもつ父親（「想像的な父親」）として「空虚」を覆ってナルシシズムを満たしていることが、魅力の大きな要素となっているジャンルと考えられるのではないかと思う。

一方、ミステリーやホラーといったジャンルには、全能感の表現と陰鬱な要素とがともに見られる。黎明期のSF小説であり、またホラー小説でもある『フランケンシュタイン』は、当時のゴシック・ロマンスに親しんでいたメアリ・シェリーが書いた、神の領域に挑もうとした科学者が怪物を作り出す物語である。こうした話には、ナルシシズムと同時にそのもう一つの面であるアブジェクトも見られる。

例えばエドガー・アラン・ポーはやはりゴシック・ロマンスの影響を受けて、探偵が活躍するミステリーの元祖とされる物語を書いたが、その一つである「モルグ街の殺人」では、冒頭で語り手と友人オーギュスト・デュパンの共同生活が描かれる。フランスでデュパンと出会った語り手はその神秘的な洞察力に魅せられ、自ら資金を出して共同生活を送るようになる。「夜そのもののために夜を愛する」奇癖をもつデュパンとともに、昼夜逆転の芸術鑑賞と議論のディレクタント的生活に耽溺するのである。江戸川乱歩も土蔵でロウソクを灯して執筆したというが、この2人の生活ぶりも「ナルシシズムに付随するイメージ・表象・同一化・投影といった仕掛け」の一種と考えられる。まず名探偵という全能の存在があり、その全能者に対する語り手の熱狂的同一化がある。それと隣接して語り手が「漆黒の女神」と母親的ともとれる表現をしている夜の闇への2人の愛好があり、やがてそれがモルグ街という死の名を冠する町での異常な残虐殺人事件というアブジェクトの表現につながっていく。

ポーの後を受けてそのホラー文学的側面を開拓し、クトゥルー神話という個人を超えて描き継がれる作品を作り出したH・P・ラブクラフトの作品は「人類が直面したことのない恐怖」を描くアブジェクトの宝庫であるが、ラブクラフトが半ば自分の趣味として書いた「未知なるカダスを夢に求めて」では、主人公が夢で見た理想の都市を求めて夢にわけ入り、宇宙を飛ぶ猫族などに助けられつつクトゥルーの眷属の追撃をか

わして見事目的を果たすという SF 的でナルシズム的なストーリーが展開する。

ここでも「空虚」の恐怖はオブジェクトとして描かれている。

究極の運命にむかい目眩くばかりに突進み、暗澹たる闇のなかで目には見えない触手にまさぐられ、ぬらぬらした鼻面を押しつけられ、名も知れぬものどもに嗤笑された。(p. 328)

しかし、それは全能感に裏打ちされた美的効果のカタルシスによって防衛されている。「喪失の顔貌」は、ここでは「誇らしげな態度と整った顔立に暗黒神や墮天使の魅力を備え」(全集 6, p. 316) た若者の姿で現れた、千の顔をもつ〈這い寄る混沌〉ナイアルトホテップというオブジェクトと全能性の混合体へと変貌しているが、これも「超記号」の一種であろう。

このように SF・ホラー・ミステリーといったジャンルは、オブジェクトや空虚の覆いとしてのナルシズムと、現前した全能者・全能状況との同一化希求に満ちている。なかでもモダンファンタジーの一つの転換点となったアーシュラ・K・ル＝グウィン『アースシーの魔法使い』(邦題『ゲド戦記 1 影との戦い』)のような作品は、自身の持つ深淵や空虚の実体化した〈影〉と向き合っ、それを人格に統合するというイニシエーション的統合パターンになっている。

SF・ホラー・ミステリーさらには児童文学、ファンタジーといった文学のサブジャンルはエンターテインメント性が高いものだが、『ゲド戦記』のようにエンターテインメント性に加えて人間性の奥深くの真実を掘り下げている作品も多い。本論で見てきたナルシズム論に引きつけていえば、「空虚」とその自己愛的な覆いがあらかじめ完成された予定調和として提示されるのではなく、主人公もしくは作者が「存在」を賭けて空虚と向き合い、一次同一化に相当する心理的作業を行うプロセスが提示しているような作品である。村上春樹の作品を例にとって見てみよう。

村上春樹の作品ではナルシズムの表現はゲド戦記同様、「空虚」を覆うだけでなく「空虚」と向き合っ、掘り下げるために使われている。そこでは主人公たちが自らの内面とリンクする恐怖の対象と向き合うプロセスが頻りに描かれる。村上春樹は「何か」「空っぽ」「空白」などの言葉でその名指しえぬ空虚を描写するが、その際に女性キャラクター達はその恐怖を慰撫する役回りとして描かれる。

例えば、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』では地下のやみくろの世界を旅する計算士を博士の孫娘が導いていく。『ダンス・ダンス・ダンス』では「向こう側」に引き込まれて消失しそうになる主人公にリアルな現実を取り戻させてくれるのはホテルの受付嬢であるユミヨシさんである。『海辺のカフカ』では田村カフカという仮名の少年が生と死の交錯する「リンボー」で文字通り「母親」かもしれないとされる図書館の佐伯さんと会う。

つまり村上春樹作品では女性キャラクターが空虚を覆うナルシズム装置の一部として存在していて、彼女たちの助けを借りながら主人公は内的な「空虚」の核心に近づいていくのである。

村上春樹作品では「空虚+全能感」を体現した場が、初期作品からある種の異界として設定されていることが多い。

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』では、端的に空虚を体現した「世界の終り」という名で呼ばれている、計算士の固定された「意識の核」の世界がある。そこは博士によれば、全てがあり同時に全てがない場所である。「完全な壁」によって外界と遮断されたその場所で、計算士の意識内自己である夢読みは、女性助手の心を見いだすことと死にゆく自分の影を救うことを試みる。つまり全能感の支配のもとで愛着対象の喪失と向き合うのだ。

『ねじまき鳥クロニクル』では妻のクミコが失踪した後、トオルは空き家の井戸にもぐって「完璧な暗闇」を体験する。その後井戸の壁を抜けてたどり着いたホテルのような場所で、トオルは謎の女性(クミコだと後でわかる)や部屋をノックする危険な男という固定状況に繰り返し遭遇する。この場所は「世界の終り」の町と同様に分離の「空虚」が凝固した精神内界である。

『海辺のカフカ』の主人公田村カフカは、家出してたどり着いた四国の森にある不思議な町で、4歳の時に自分を捨てた母親と邂逅し、慰撫される。母親は少女の姿で料理を作ってくれたり、成人女性の姿で対話してくれたりする。このような形で、非日常的な愛の直接無媒介的現前が見られるのである。カフカは母親の腕から血を飲むという形で、同一化を果たした後、母親から分離して生の世界へ戻る。その際に痛切な分離の痛みを感じる。このようにカフカの体験は母との根源的な融合=分離というクリステヴァ的ナルシズムを体現している。父を殺したかもしれないというエディプス状況に置かれ、森の中で内的な恐怖に圧倒さ

れかけていた少年は、最後の場面では母親から受け取った絵を形見として抱えて眠りにつく。

アブジェクトはキャラクターの形（『ねじまき鳥クロニクル』のノボル『海辺のカフカ』のジョニーウォーカー氏など）や物の形（『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』のやみくろとその地下世界、南のたまり、『海辺のカフカ』の森とそこに潜む何か、『ねじまき鳥クロニクル』の井戸の闇、ねじまき鳥、仮縫いの生き物、笠原メイのいう死のかたまりなど）で登場し、主人公は恐れに屈服しかけることもあるが、防衛を捨ててそれに向き合いもする。

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の計算士は、自分がこの世界から消えるという状況で世界とそこに住む人々を祝福する。これは『カラマーゾフの兄弟』のアリョーシャに倣ってそうするので、クリステヴァが論じたドストエフスキーの「赦し」との同一化そのものである。

村上春樹の場合、クリステヴァのいう「想像的な父親」に相当するキャラクター（『ねじまき鳥クロニクル』の間宮中尉、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の大佐など）は背景に退いている。『海辺のカフカ』のカフカの父親であるジョニーウォーカー氏は、クトゥルー神話に出てきそうなアブジェクト的存在である。途中、リンボーと呼ばれる場所に彼が現れたときには、フロイトが論文「不気味なもの」で取り上げたホフマン『砂男』に出てくるコッペリウスのような、目玉や眼窩にこだわった描写がされている。

男はむしろ声をあげて笑っていた。眼球があつという間に切り割かれ、眼窩からはみだしてこぼれた。カラスと呼ばれる少年は男の両目を執拗に攻撃した。目のあった部分を穴のようにからっぽにしてしまうと（後略）(p. 367)

この引用でもわかるように父親的な第3項との直接無媒介的同一化は望めそうになく、それに代わって主人公を支えるのが上に挙げた女性キャラクターの共感的振る舞いや分身的同性キャラクター（『海辺のカフカ』のカラスと呼ばれる少年、初期作品の友人「鼠」など）である。そうした人々の助けを借りつつ主人公が行うのは、アブジェクトに抗して空虚感と自己愛を統合するというクリステヴァのいう一次同一化とほぼ同じ作業である。

最後に直接無媒介的の現前による同一化と解釈できそ

うな表現を、現代の女性作家からいくつか挙げてみたい。

梨木香歩の『西の魔女が死んだ』では、最後の場面で主人公の小学生まいは死んだ祖母の声の現前に包まれ、最後に喧嘩別れした後悔を解消する。また、『裏庭』の餓鬼のシーンでは、倒れたテルミーと追ってくる嫌な爬虫類（アブジェクトに相当する）を茜色の雨が朱色に染め上げ、みんな同じだと思った途端に「何か弾けて、世界がまっしろになり、何もかも消えた。餓鬼に喰いつかれていたはずの肩も、あの服はいつのまにか修復していた。」(p. 333) という瞬間的カタルシスが生じる。梨木香歩作品にしばしば描かれるこうした瞬間的な心理的変容も、直接無媒介的のナルシズム的転移の表現と見ることができる。

小野不由美『月の影 影の海』では日本から十二国という異界に連れられていった高校生の陽子は、結局王であることが判明するが、王を選ぶのは十二国では麒麟である。麒麟は天意を受けて直感で王を選ぶので、それ自体が絶対者の直接無媒介的の現前である。慶国の麒麟景麒に選ばれた陽子は、自らの内部にあるネガティブな感情とそれを読み取って陽子を苛む蒼猿という妖魔（これらがアブジェクトに相当する）に打ち克って、王としての自己を引き受ける。日本に生まれた高校生でありながら、実は「胎果」という十二国の住人で王であったという、一種の貴種流離譚的ナルシズムに同一化するストーリーである。陽子の自覚のきっかけとなる楽俊という半獣のネズミは、作中でしばしばそのフカフカした毛皮の抱き心地に言及される、ウィニコットのいう移行対象的存在である。容貌からは父親的という形容は似合わないが、移行対象であり同時に指南役でもある楽俊の存在は、数々の困難に見舞われる陽子にとってナルシズムの覆いといえるだろう。

#### 注

- 1) アブジェクトは注2のように「分離されて投げ捨てられた」という意味なので、対象関係論でいう分裂排除された「悪い対象」の投影同一化そのものであるが、クリステヴァはこの時期は主体も対象も存在しないと考えるので、「対象」を自己の外に排出するという言い方はしない。しかし、ピオンの「不在の乳房」(the absent breast)などはアブジェクトや本論で扱うナルシズムの「空虚」とほぼ同じ論点を扱っている。下は拙著からの引用である。

母親や部分対象としての乳房の「不在」は、まるで自分を脅かす実在物のように感じられ、現実と想像の区別がつけられないので、現実の経験から学

ぶことができない。恐怖は思考からすり抜けるので、存在はするがつかみどころのない「言いようのない恐怖」(nameless dread)となる。(『幻滅からの創造』pp. 45-46.)

ビオンの場合、この「不在」を意味のあるパターンに変形するものは、アルファ機能とビオンが呼んだ、赤ん坊にとっての乳房や患者にとっての分析家が果たすような機能である。ジョアン・シミントン、ネヴィル・シミントン『ビオン臨床入門』森茂起訳、金剛出版、2003年、p. 107 参照。

2) アブジェクトは「おぞましいもの」「棄却されたもの」などと訳されているが、70年代の著作の邦訳では同じ「棄却」という訳語でも元はフランス語の“rejet”である。(例えば『詩的言語の革命』『ポリログ』の邦訳ではそうなっている。)クリステヴァは『恐怖の権力』(1980年)で「アブジェクト」や「アブジェクション」の定義をして以降、“abject”という用語を頻繁に使うようになる。また、“ob-jet”(対象、対面に ob- 投げられたもの、jet は投げるという意味の動詞 jeter からきている)“re-jet”(拒絶、元に re- 投げられたもの)などと揃えたクリステヴァの造語“ab-jet”(分離されて ab- 投げられたもの)もアブジェクトとあまり変わらない意味でしばしば使われ、「愛のアブジェ」のアブジェもこれに当たる。

3) *Tales of Love*, p. 42

If narcissism is a defence against the emptiness of separation, then the whole contrivance of imagery, representations, identifications and projections that accompany it on the way toward strengthening the Ego and the Subject is a means of exorcising that emptiness. Separation is our opportunity to become narcissists or narcissistic, at any rate subjects of representation. The emptiness it opens up is nevertheless also the barely covered abyss where our identities, images, and words run the risk of being engulfed.

なお、「空虚」の覆いとしてのナルシズムというのはアンドレ・グリーンが『ナルシズム論』の概念であると、クリステヴァ自身が『愛の理論』で述べている。

4) 拙論「村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』における「美的対象」の回復：ドナルド・メルツァーの「美的対象」および「閉所」理論の文学研究への応用」『甲南大学紀要 文学編』167 (2017年) 参照。

5) 『アブジェクション、メランコリア、そして愛』(*Abjection, Melancholia, and Love: the works of Julia Kristeva*. 1990) というタイトルのこの論集では、シンシア・チェイスがクリステヴァのナルシズム論に言及している。チェイスの論はド・マンのデコンストラクションとの比較で、ほかにこの論集ではクリステヴァ自身の思春期文学論をはじめ、ヴァージニア・ウルフ論、T・S・エリオット『荒地』論(アブジェクトのみでナルシズムや一次同一化には触れていない)などの多くの著者による文学研究も収録されている。またクリステヴァの一次同一化についてはジョン・リヒ

テの「ジュリア・クリステヴァ作品のアブジェクション、愛、そしてメランコリア」で論じられている。しかし、クリステヴァのナルシズムや一次同一化、「想像的な父親」とアブジェクトの理論を文学作品の理解に直接応用する参考になるものはわずかである。

6) Darko Suvin は SF を古典古代や18世紀の宇宙旅行譚などのいくつかの時期に分け、この本が出版された1979年時点から見て最近の50年ぐらいを現代の SF 群と呼んでいる。

#### 参考文献

- 石田暢子「Kristevaの主体形成とアブジェクションの発生」『大阪府立大学人間社会学研究科心理臨床センター紀要』2010. 3, pp. 33-60. (大阪府立大学学術情報リポジトリ)
- 小此木啓吾、北山修他編『精神分析辞典』岩崎学術出版社、2002年。
- クリステヴァ、ジュリア『恐怖の権力くアブジェクション』試論』枝川昌雄訳、叢書ユニベルシタス137、法政大学出版局、1984年。
- クリステヴァ『初めに愛があった』枝川昌雄訳、叢書ユニベルシタス215、法政大学出版局、1987年。
- クリステヴァ『愛のアブジェ』『女の時間』棚沢直子、天野千穂子編訳、勁草書房、1991年。(pp. 153-191)
- クリステヴァ『黒い太陽 抑鬱とメランコリー』西川直子訳、せりか書房、1994年。
- シミントン、ジョアン、ネヴィル・シミントン『ビオン臨床入門』森茂起訳、金剛出版、2003年。
- 梨木香歩『裏庭』新潮文庫、2001年。
- 西川直子『クリステヴァ ポリロゴス』現代思想の冒険者たち30、講談社、1999年。
- フロイト、S.『自我論集』中村元訳、ちくま学芸文庫、1996年。
- 村上春樹『海辺のカフカ』下、新潮社、2002年。
- モロン、フィル『現代精神分析における自己心理学—コフートの治療的遺産』上地雄一郎訳、北大路書房、2007年。
- ユング、C.G.『赤の書』ソヌ・シャムダサーニ編、河合俊雄監訳、創元社、2010年。
- ラブクラフト、H・P『ラブクラフト全集』6 大瀧啓裕訳、創元推理文庫、1989年。
- Asimov, Isaac. *Foundation*. 1951; NY: Bantam, 1991. (ebook)
- Fletcher, John and Andrew Benjamin. eds. *Abjection, Melancholia, and Love: the works of Julia Kristeva*. 1990; Routledge, 2012.
- Kristeva, Julia. *Tales of Love*. trans. Leon S. Roudiez. *European Perspectives*. Columbia University Press, 1987.
- Lovecraft, H. P.. *The Complete Fiction* (ebook)
- Suvin, Darko. *Metamorphoses of Science Fiction: On the Poetics and History of a Literary Genre*. Ralahine Utopian Studies Book 18, (ebook) 1979; Berlin: Peter Lang, 2016.